湖陵同窓会報

創刊号
34年7月23日
編集発行
湖陵同窓会
事務局
釧路市北大通八ノ六
米内印刷KK

發刊の御挨拶

中川久平

一口に云へば湖陵同窓会とは湖陵を卒業した我々が年令や社会的地位や職業等を超越して御互に助け合ふ会であると思ひます。どうすれば御互に仲良くし御互に助け合ふことが出来るか。其の答は簡単です。即ち母校に学びそして遊んだ往時の童心に還つて御互におつきあひすることです。

英語の辞典をひきますと母校と云ふところに alma mater アルマ・メイターと書いてあります。これは元来 latin ラテン語ですが其の意味は「育ての母親」と云ふことです。ですから同窓会とは同じお母さんに育てられた子供と云ふことになります。即ち子供の心に還へると云ふことが同窓生として一番大切なことであると考へます。童心は純一無雑です。前母校創立よりこの方湖陵の講堂兼武道場には「思無邪」と大書した大額が懸つて居りましたこの額は現在市立柏木小学校の校長室に掲げてありますが「」と読みます。意味は「純真なる心」童心をもて」と云ふことです。童心の把持即ち湖陵の伝統であると信じます。そして童心を持して失はず育ての母親湖陵を中心として御互に仲良くして御互に助け合ふことに一生懸命になれば真実な七千会員の和が得られここに偉大なる団結の力が創造されるものと思ひます。

本紙は熱心なる幹部会員の純情ひたぶるな燃ゆるような母校愛の止むに止まれない発露によつて發刊を見るに到つたものです。本会同人諸君はこの趣旨に共鳴せられ萬事を放擲してもう一度母校に帰つた気持になつて後援して下さい。そして本会を盛大にしましよう。湖陵同窓会の發展は母校の繁栄であり又我々会員の幸福そのものでもあります。何卒よろしく御願ひします。

茲に会員諸兄諸姉の御健康を祈ります。

（湖陵同窓会長、第一回卒、釧路市教育委員長、湖陵梅楓塾頭、釧路埠頭木材KK専務）

同窓会館を作ろう

米内富久司

湖陵高等学校の前身釧路中学校が春採の丘陵に建つたのは、大正二年である。それから今日まで種々な変遷を経て、現在の北海道釧路湖陵高等学校になるまで凡そ五十年に近い。

昔は、といつても大正の中頃にかけては東北海道に唯一の中学校として、釧勝根北の秀才が集つたとの事である。

大正七年に三十一人の第一回の卒業生を送り出してから、高等学校の今年の卒業生三九一名を入れて七千有余名の同窓生が世間に活躍しているわけになる。極く最近まで代議士を二人を持つていたりして一寸景気のよい面を見せていたが今はさびしい。

卒業生の中には随分色々な分野で活動している人が沢山いる。同窓の諸君は名簿を見ただけでも驚く位と思う……。それに引換えて同窓会の現況はあまりにもあわれを感ぜさせられる。総会をやるにも、高等学校の生徒がアイスホッケーで全国優勝しても、野球に勝つて札幌へ行くといつても、一々先輩に寄付帳を回して、やつと凌いでいるような情けない状態だ。寄付を出す御は私の知つている範囲でここ二十五年ぐらい毎年のように同じ顔触れが集められているようだ。これでは困るというので愛校心人一倍強い中川久平先輩が同窓会をがつちりしたものにして中学校と高等学校の卒業生のギャップを除き、同じ湖陵魂に生きようと再建に掛り、同窓生各位と総会その他を経て毎月五十円宛を拠金して戴くことに決議され、やつて見たものの職場で徹底しなかつたり、一人や二人の熱意では大きな同窓会に対しては到底成果を挙げ得ないでしまつた。しかし湖陵出身の学校の先生方の会でこれを実行されて、確実に拠金して戴いているが、これは本当に有難いことと思つて頭の下がる思いがする。

卒業して世間に出た同窓生から会費として毎年集めることが如何に困難なことであるかは、その衝に当つた者でないと想像がつかぬと思うが、先ず不可能に近いと断言出来る。

それでも市内在住の同窓生は、私も好きで幹事長などやつているわけではないのだが、会券を印刷したり、PR上何かと都合がよいからやれとのことでやらされているらしい。やつてみると仲々大変だ。良くもいわれず、文句ばかりいわれたりするが、総会で皆に喜んで貰つたりするとまた嬉しい気もする。同窓会の目的は、なんて型苦しい事をいつたつて、要は在校生と卒業生、同窓生同志の親和が一番と思う。縁あつて先輩後輩となつたのだから、先輩はやはり後輩の面倒（主として在校生）をみるのが順当らしい。面倒を見るといつても、やはり先立つものは金ということになる。如何に精神面の応援といつても現状では金がなくては具体的な事業や、その他諸後援は出来ない。

釧中―湖陵高校と東北海道に雄名を馳せている湖陵が、湖陵の同窓会が、基金皆無、事業不能というのは余りにも情けないと思う。網走、北見の高等学校は、勿論旧制の中学からの延長であるが、共に同窓会館を建設したそうだ。今の江南もと釧高女ですら、同窓会館を持つているのに。

同窓会館の夢も基金造成も決して夢ではない。父兄と同窓生が少しの気の持ち様で……。私は次の案を考えてみた。釧中といわず高校といわず卒業生から会費を集めるのは非常に難かしいが、各期の熱意ある同窓生が主体となつて同窓会維持会員のようなものを作り、一年間に一人千円ほど集めて戴くことにする。現在市内に少なくも二千人位の同窓生がいるので、仮に一割の同窓生が賛意を表してくれると年額二千万円拠金して頂けることになる。

（四頁へ続く）

目録

1頁発刊の御挨拶　中川
〃　同窓会館を　米内
2　不燃性の新校舎丹葉
3　同窓会役員
4　歴代校長の写真住吉
5　湖陵会について鈴木
〃　湖陵に学んで　四方
6　湖陵高校の沿革
〃　わがあしあと　菅原
7　平沢三代校長　三原
〃　一六会について中江
8　呼びかけ　人見
〃　想い出　藤井

全市民打つて一丸

焼失の涙を再建の歓喜に

の建つまで

※る渦中の人物であつたので、その頃の経緯を、記憶の明確なうちに記し、資料の散逸しない中に整理して、出来るだけ誤りなく後進に伝えることの要を痛感し、ここに録す。

火災の現況（昭三八・二・二三・道新朝刊）

「二十二日（日）午後六時頃、富士見町七一道立釧路湖陵高等学校木造二階建千五百坪は、職員室前廊下外側のスキ間から出火、北東九メートルの風速に、火は……さらに隣接のろう学校を全焼、七時三十分鎮火した」火災発生と同時に一番活躍したのは、何といつても先生、生徒で、いろいろなゆきちがいのため、比較的消防の活動がおくれたのに、危険をものともせず、紅蓮の焔に追われながら消火作業の手伝、重要物件の搬出に涙ぐましい働きぶりを示した北海タイムスは、これを大きく報道している。

復旧対策委の発足と陳情運動

明くる二十三日僅かに焼け残つた体育館の一角、体育教官室が臨時職員室兼本部となり、応急対策が施行された。つづいて午前十時には、市の第二助役室に、市、教委、学校、PTA、同窓会の代表者会議、午前十一時からは、公民館第二号室にて、市、議会、教委、学校、PTA、同窓会の代表、道議、報道関係者の緊急会議。二十四日午前十時、公民館二号室に湖陵高校災害復旧対策委員会が発足、（全市各界各層一丸となつた。）午後一時、同窓会幹部の緊急協議会、この夜、対策委員会において選出された代表は、次の請願書をもつて出札した。

湖陵高校ろう学校災害についての請願書

二月二十二日の火災により湖陵高校、ろう学校は全焼したのでありますが、この対策本部を市教委事務局内に設置、鋭意善後措置を講じつつありますが、学校教育の重要性よりして一日も速かにこれが復旧に特段の御配慮を賜りたく請願致します。

昭和三十八年二月二十五日

災害復旧対策本部

（市長、議会議長、教委委員長、連PTA会長、PTA会長、同窓会長）

一、応急対策＝別紙の通り生徒の収容については災害応急措置を講じて授業の継続に万全を期しているが、之に要する経費、湖陵高校需用費二百二千万円、緊急建築改造費三百五十三万円、計五百七十三万円、及びろう学校復旧費百六十万円を追加予算化されるよう、格別のご高配をお願い致します。

二、新校舎建築計画の促進について＝湖陵高校は道教委において老朽のため改築の必要性を充分認めていたものであるが、教委の計画を復活予算化されるとともに、新年度早々新校舎建築に着手されるよう特段の御配慮をお願い致します。

三、その他

×　×

二月二五日　午前八時、札幌道庁横、北門館において、東京より急遽札幌へ航空便で戻られた佐藤釧路市長を中心に、陳情団は種々打合わせをした。この時PTA、同窓会より湖陵高校長牧野包敏、教頭沖口三郎氏を校舎再建落成するまで転出することのないよう、道教育委員に佐藤市長より懇請して戴いた。次に、午前十一時より陳情団一行は左記に陳情のため、各室を歴訪する。（菊地、太田両道議とともに）

①道議会議長、副議長、左右社会党、労農、公正、自由、協同改進　②山田教委次長　③田中厳文知事　④文木総務部長、新内総務課長　⑤教育委員（水島鎌田、坂井、西野）

不燃質校舎建築募金運動

幸いにも、釧路地方出身の坂井委員の特別なる力添を得、ただどこにおいても一応話題になつたのは、過去による木造校舎焼失を不燃質建造物にすることに踏み切ることの世論に対するきびしさの心配、つづいて、同窓会は**三月一日**付各新聞に、母校再建の為の募金決意を表明せる檄文を広告、同窓生の奮起を促した。

四十年の伝統を誇る母校校舎は全焼した伝統の湖陵精神を沈潜させてはならぬ

旧吾々は左記により同窓生大会を開いて、往校焼生を叱咤激励するとともに、緊急施設設置のため、金百万円を拠金目標に努力したい。男子は飲み代その他を節約、女子は白粉代の一部を犠牲として母校の危機打開に協力せられる事を望む。

そして**三月二日**午後六時から公民館二号室において卒業生各期代表者会議を招集、**三月七日**には災害復旧対策委員会、菊地道議より鉄筋は難しいとの内報連絡あり波状的陳情団選出が決定される。

同窓生大会開く

三月八日　午後六時、市公民館大ホールに於て母校再建促進同窓生大会がはなばなしく開催され、母校愛に燃ゆる在釧卒業生が続々と寄つてすばらしく気勢があがつた。

司会者　坂下忠勝、難波太郎、徳田嘉一郎

一、開会宣言　米内富久司
二、校歌斉唱　全　員
三、趣旨説明
　大会長　丹葉　節郎
四、湖陵校の災害復興対策説明
　学校長　牧野　包敏
五、辨論「母校を思う」
　卒業生（一期）野坂作五郎
　（九期）鈴木　徳一
　（十一期）野尻　静
　在校生　沢田、浜口嘉智子
六、激励のことば
　釧路市長　佐藤　宏平
　PTA会長　岩堀　氏康
　市民代表　菅原　覚也
七、議事
①議長二原正二（七期）
②募金趣旨、目標額、方法
③宣言、決議の表明
④関係各方面に懇請文打電
⑤大会代表選出陳情に派遣
八、応援歌　全　員
九、萬才三唱
　中川　久平（一期）
十、宣　言
　金安　教治（二十二期）

会場正面には、旧釧中徽章と、現湖陵高校徽章が久本画伯筆のもとに掲げられ、「母校焼失の涙を母校再建の歓喜に」「四千の同窓生に告ぐ、母校再建の推進力たれ」の標語が大きく舞台両袖に張り出されていた。この夜、一同の声援に送られて丹葉、浜野の大会代表が、牧野校長、岩下連P会長、張江PTA副会長と共に出札。

三月九日　道庁に文木総務部長道教育委員教育長に陳情、また、丹葉、浜野両代表は、同窓会札幌支部長、北大教授、工博、阿部興作氏外各期代表と母校再建について協議。

三月十日　先生方並びに生徒会は、此日より五日間にわたつて街頭募金を開始、またPTA、同窓会と力を合わせて、地域別に簿冊を配付し、学校長に対する寛大なる処置を仰ぐための嘆願書、署名運動開始。

三月十二日　同窓生各期世話役自動車にて全市にわたり湖陵再建に対して、白熱的援助を懇請して回る。

三月二十日　災害復旧対策委員会

四月　同窓会は米内事務局長等の努力により、募金準備体制も整つたので各期、各地、地元大職場に三段構えで募金趣意書、寄附帳を送付、拍車をかけ帯広、旭川の支部に幹部を派遣す。また不燃質鉄筋鉄骨建築をこの機を逃しては自信なしとの見地のもとに、大蔵省等に起債の枠の拡大に猛運動を開

不燃性校舎

木造建築の湖陵高校舎が焼失して、不燃失鉄筋鉄骨校舎に再建、落成する期間、私は卒業生を代表して学校、PTAと一体となり、各方面に接衝する役を仰せつかり、いわゆ※

昭和廿八年四月　湖陵同窓会

旧釧路中学校卒業
現湖陵高等学校卒業
同窓生各位

記

一、募金目標額　一金壱百万円
一、募金一口　一金参百円
一、募金期限　昭和廿八年五月十五日限
一、募金送付先
釧路市幣舞町十二
釧路市公民館内
湖陵同窓会本部　御中
振替口座番号小樽一五九二九番
一、贈呈方法等は役員に一任のこと
一、募金方法　各期、各職場、各地域

同窓生名簿作成の為にも卒業年月、職業、職名自宅、並に勤務先、住所、電話等記入のこと

宣言

「旭よ東方の釧路岬湖陵に立てる我が学舎」の校歌と共に旧釧中並に現湖陵高校卒業生に一入愛着を年毎に覚えしむるものは四十有余年の間、風雪に耐えたる古色蒼然の母校の木造校舎である。

今や永き教育の歴認められ、まさに不燃質建造物に移行計劃樹立されんとする寸前慮らざりき劫火に災され一瞬にして烏有に帰す、顧えば洵に口惜しき極なり。

然る処地元釧路市民は打って一丸となり学校災害復旧対策本部を急遽設置、幾多の隘路を克服して真剣に強力なる運動を波状的に展開しつゝありされば卒業生たる我等これを対岸の火災視し徒に静観すべきの秋に非ず、己が今日を築き根抵に湖陵ありと思いを致し奮然起つて母校の一大事に参劃を誓い母校再建に全力を傾倒せんことを茲に宣言する。

昭和廿八年三月八日　母校再建促進同窓生大会
（湖陵同窓会）

決議

北海道綜合開発計劃の実施、教育の機会均等等の徹底により道東地方に知性の多分に要望さるる折しも伝統に輝く湖陵高校々舎は焼失す卒業生たる我等一致協力し関係方面に接衝次の事項の実現を期す。

記

一、恒久対策として不燃質校舎の建造を目途として短日月の間に実現を期す。
一、応急対策として現学生の学習環境の整備に臨機応変の適策を尽す。
一、卒業生の母校思いの愛情をより喚起し湖陵高校再建に結集せしめ速に目標額金壱百万円の募金に遺憾なきを期す。
一、釧路市の学校災害復旧対策本部と連絡を緊密にし予期以上の成果を納むる様努力す。

昭和廿八年三月八日　母校再建促進同窓生大会
（湖陵同窓会）

不燃質で建てられた新校舎

起債六千万円承認

見ず知らずの人も寄付

六月十二日　湖陵高校再建促進に災害復旧対策委員長はじめ役員出札し、道庁内関係各部を訪れ、速やかに工事着手方を懇請せるところ、これに対し佐々木道財政課長は新内総務課長等を大蔵省に派し五千八百万円の起債を申請中との話でその成功を祈る。その後間もなく**七月六日**には災害復旧委員会は、次の様な明るい文書を発送することが出来た。

中央で六千万円の起債が承認されて、道側の意向では地元において二千万円の資金を調達してくれるならば、五年年賦でこれを償還するものとして鉄筋造で建築する意志あるので、緊急役員会を七月八日開催する。

貯畜組合も結成

この結果、湖陵校災害復旧貯蓄組合結成協力委員の委嘱状が発せられ、一口壱万円、一カ年据置の拓銀預入れが強力に推進された。結果的には壱千万円目標が弐百万円も上回る喜びの結果を得たが、この借り入れの努力は尋常一様で無かった。湖陵高校に生徒も出して居らぬ同窓生でない方が、進んで協力して下すった時には感激した。反面相当深い関係にありながら、しかも余裕あると見られているのに、全然非協力な輩もあり、憤慨極に達したこともあった。その中に釧路市では補助起債七百万円を可決、更に昭和二十九年一月には日銀釧路支店、拓銀釧路支店の特別な配慮で融資、弐千壱百万円が確定、隘路が面白いほど次々と打開されて行った。この間、新校舎建築工事は設計一切道工営課の井上技師が担当、田中組によって施工された。

▽二十八年九月十五日地鎮祭
▽十月九日初くい打
▽二十九年五月二十二日上棟式
▽八月二十二日竣工
▽工事種類（鉄筋コンクリート鉄骨造）延七九二坪三七（一階一二二坪四五、二階一四〇坪三九、三階一三三坪七三、塔屋五坪八）

かくて昭和二十九年九月二十二日全市民歓喜のうちに落成式ならびに祝賀会が盛大に挙行された。不燃質とは無理な願いなので自信が無かったのに恐らく異例と思われるこの有難い御配慮で希望が十二分に満たされたのは、全学校、PTA、同窓会、それにも増して市、市議会、市教委、いな全市民打って一丸となって湖陵の悲境に心を注いで下すったお蔭と、自分は禁断の園に入る様な胸のとどろきを覚え感激の涙に咽んだ。ただ忘れられない想い出の一つは、この落成の喜びを目前にして行われた五月のPTA総会が随分荒れたことだ。

（昭二四、五、一七）
（第八回卒、釧路市公民館長）**丹葉節郎記**

お知らせ

◇本年度総会＝八月中旬
◇会報第二号発行＝九月末日に原稿を締切り十月末日発行の予定。広く近郊遠隔地の方々の提稿を歓迎致します

◇**お願い**
同窓会員名簿を充実させるために卒業年月、住所、職業、電話など事務局へ御連絡下さい。

同窓会役員

会長　中川久平　第一期
副会長　両角克治　第五期
浜野幸四郎　第七期
関清水賢治　第三十一期
事務局長　米内富久司　湖陵三期　第十二期

歴代校長の写真

住吉匡

学校の校長室には歴代校長の写真なるものが並べて掛けてあることが多い。幸い私のところにはそれが無い。火災で焼けてしまったのだろう。私としては誠に有難いことである。想像しても頂き度い私が転任した後、私の写真が校長室の壁にかけられ、晒し物となって居る姿を。私は自分でその浅ましい有様を見る気はしない。嫌なものだ。ゾーツとする。

比較するには相手が少し大きすぎて失礼だが、前道知事田中敏文君が若少にして知事の椅子につかれた頃お偉方の写真数十枚が一面に下つて居つたものだ。暫くして行つて見ると、彼は全部それを取り去つてしまつて居た。良いことをしてくれたと内心喜んだのは私だけではあるまい。ところが間もなく私が赴任した学校の校長室にはズラッと歴代校長の写真が並んで私を見下して居るではないか。これはいかんと思つて居るところに写真屋氏が前校長の大きな写真を持ち込んで来て追加計上されてしまつた。私は歴代校長さん方に誠に御気毒に堪えない気持で暗然とそれを見上げて居つた。時に、PT会の某役員の方が現れた。

「ヤア校長！今度の校長は若いんだなア！ウンこの写真の○○校長には私も随分応援したんだが案外駄目な男だつたネエー」。私はアトの言葉を聞かずにサッサとトイレに行つて十分ゆつくりと用を足してから小使室でお茶をよばれて校長室にもどつて来た。勿論客は帰つたあとだつた。翌日、私は小使さんに頼んで全部の写真を下して取片付けてもらつた。その後北海教育評論かなにかに、住吉という校長は不遜な男で、その内つまづくだろうと言う様なことがチョット書いて有るのを見せられ、成程そんなものかなあと思つた。たまたま道の教育長宅を訪問した折に、大先輩のK校長とN校長が来て居られた、教育長の勧告で勇退されたので、教育長が自宅に招待しその「老」を労われたのである。その日招待されたO先生が現れないので、折角の用意を無駄にしてもつまらぬからオ前が末席にしてもつまらぬからオ前が末席にしてもつまらぬからオ前が末席で一人前平らげろとの御話しである。悪い気もしなかつたのでノコノコと座敷に入つて行つた途端に「馬鹿者ッ」とK先輩の大喝を喰つた。オヤと思つて座り直し、上げた顔に罵声は叩きつけられた「先輩校長の写真を引き下す様な馬鹿者に校長が勤まるかアッ！」形勢不穏と見て脱出を計つたが既に遅く、教育長とN先生が割つて入つて「マア、マア」ということになり、一応の挨拶が有つて宴となつた。

宴半ばにして教育長が私の前に来られ「君、一体どうしてあんなことをしたんだね、僕には理由が分らんがねえ」と言われる。突嗟になんと説明してよいか分らなくなり、愚にもつかないことをモゾモゾと言つてしまつた「兎に角教育勅語が恥をかゝされて居る時代ですからねえ、東京では偉い人々の銅像がみんな無くなつてその跡に何処のモデルか分らない女の裸が立つてますよ」何んのことやら自分でもおかしな言い方をしたものと思うがそのまゝ「マアマア」と言うことでその場を過してしまつた。これはもつぱらN先生取りなしの御陰である。先日N先生がヒョツコリ当地に来られて電話を頂いた。「ヤア何時もながら元気な声だね、大いに頑張つて下さい。」時に参議院をよろしくとは言われなかつたが何か重要な御仕事の様子だつた。

話は写真のことに戻るが、こんな私も学校の創立記念日には歴代校長の写真を正面に飾り、大いにその功を称えることを忘れなかつた。その内に歴代校長に任えたという老小使が来て、先生あなたの考えは分つた、私もやつぱりそれが良いと思う、と言つて写真が掛けられて居た壁の釘や木片を取り除いて、きれいに掃除をしてくれた。その後会議の席で、他校の校長が私の肩を叩いて「オイ俺も校長室の写真を取つてしまつたよ」又他の校長が、「俺もお前の説に賛成だ、写真は掛けて置かん方がいゝ」と言い出した。断つて置くが私はこのことで説を成した覚えはない。たゞ拙文を成して自らの拙い行為を恥じつゝ直言まざる先輩あるを尊しとし感謝するのみである。

（湖陵高校校長）

（一頁のつづき）

つぎに前述の先生方の会からの拠金が年額十万円、合計三十万円。現在の在校生が卒業の際一人七百二十円（高等学校入学より卒業まで月一十円ずつ三カ年）出して戴くと毎年の卒業生を四百人と見込んで二十八万円、これと三十万円を今算すれば、五十八万円となり金利を合すれば六十一万円ほどになる。この中十万円位を経常費に使用しても五十一万円残る計算となり、千円口の会員の増加と共になり、千円口の会員の増加と共に十年後には五百万円、廿年後には一千万円の基金が出来る。勿論基金は手を付けない方針で行く事にする。

湖陵は鉄筋で立派に建築された。今の在校生が三十年後、五十年後になつても腐る心配はない。湖陵百年の大計を立てても大丈夫な時期が来たと思う。三十年、五十年、七十年と永い年月に思うが、過ぎれば光陰矢の如しか、小生卒業以来すでに満三十三年、実に早いものだ。湖陵同窓会のため一層の御声援を願うや切。

（同窓会事務局長、第十一回卒、市教育委員、米内印刷KK社長）

歴代	学校	長	（カッコ内在職年月）
大正	2. 3.31—	7. 4.29	(5年2カ月)
	7. 4.29—	2. 6. 7	(9年3カ月)
	2. 6. 7—	4. 5.25	(2カ年)
昭和	4. 5.25—	7. 5.16	(3年1カ月)
	7. 5.16—	13.11.30	(6年7カ月)
	13.11.30—	17. 4.30	(3年6カ月)
	17. 5.19—	19. 7.10	(2年2カ月)
	19. 7.10—	22. 7.17	(3カ年)
	22. 7.17—	25. 4. 1	(2年9カ月)
	25. 4. 1—	30.10.16	(5年6カ月)
	30.10.16—		

創刊号発行おめでとう

酒類、食料品
小林商店
店主　釧中第十三期　小林正夫
釧路市川上町五の二
電話二一三三八番

橋場外科医院
院長　釧中第十四期　橋場亮二
釧路市栄町九の九
電話三五〇五番

早川内科小児科医院
院長　釧中第十四期　早川藤三郎
釧路市栄町六の二
電話四八三八番

伊勢内科小児科医院
院長　釧中第十六期　伊勢春雄
釧路市幸町七の二
電話二七八八番

郷土の銘酒　福司
株式会社　敷島商会
代表者　釧中第十六期　小笠原進
釧路市住吉町八〇
釧中第二十九期　梁瀬誠也
釧路市住吉町八〇
電話三三〇二・三三五一

湖陵会について

鈴木徳一

市内の小、中、高校から大学までの教職員で組織している湖陵会がある。湖陵というからには勿論釧中や湖陵の卒業生の会である。会員は二百名を突破したらしい。發足してから今日まで五星霜は経ている筈である。会の目的は要するに親睦にあるといった程度であまり八釜しい規約など作文していない。毎月俸給から八十円を天引きし、其の中五十円は本部に納め残りの三十円を貯金して、三百六拾円の会費で総会を開く。

総会は毎年一月に開く事になっており、大いに飲み且つ語るのが楽しみなのである。年齢の層も最高が第四期からだから、五十六、七歳から二十一、二歳まで。オジイチヤンと孫位の距りはある。勿論年代や時代感覚のズレの大きい事は一般社会の同窓会と変りはないのだが、それも大して気にもならないらしい。こんな所に同窓の会の良さがあるのであろう。

会としては事業らしい事はやっていない。これは会長の私が温好？過ぎるからかも知れないが、又一面から見ればこれでいい様な気もする。その理由は色々ある。その一つが教員の社会に今でも残っている閥意識である。学大卒業の若い人達にはそんなものは無いのだが、年輩者には必要以上に神経を使いハタで見ていても気の毒な人もある。考えて見ればつまらぬ話である。閥意識が最高の興奮状態にある時に、それに比例して釧路市の教育活動が前進しているかというにそうでもないらしい。教員にとって意味のある仕事は教壇の実績を挙げ、文化国家建設の礎石となる事であって、派閥抗争などにエネルギーを消耗する事ではない。

それを悟った賢明な諸君に依って湖陵会が作られたと云う訳ではないが、とに角湖陵会のしきいをまたぐ時には閥意識などという垢のついた衣は脱ぎ捨て湖陵時代の夢多き紅顔の日の童心に立帰って、飲み且つ気焔を挙げる、青年の日の学舎で培われた精神の結びつきというものは恐ろしいもので、回を重ねる度にお互の胸の中に親近感の他に何かが残っている。そんな気持が「釧路市の發展は何といっても、ガスの中で魚粕臭いにおいを嗅いで育った釧路っ児の手でなくては。」といった方向に話が進んだりもする。

湖陵会の存在価値が再認識されるのはこんな時である。眼を転じて市の政治、経済、文化等各界の中核的推進力を見る時、五十年の歴史を持つ湖陵としては、其所に活躍する卒業生の層の厚さに一抹の淋しさを感ぜずには居られないであろう。だが教員の湖陵会はそうではない。釧路市の教育の中核的推進力となっている者は少くないからだ。今後湖陵会は本部同窓会と緊密な結びつきを持ち、市の教育發展の中核をなし、道東の文化の開發に一役を買い得る様に發展するであろう事を期待している、などといったら学校の先生というものは精神年齢が低いと感心されるかも知れない。が然し常に希望に生きている所に教育者の生命があるのだと思う。湖陵同窓会も希望に満ちた会であって欲しい。

（第九回卒　鳥取中学教頭）

湖陵に学んで

四方義美

三年間の高校生活、いや三年間の湖陵生活といった方が適当であるかも知れない。この三年間僕は誰にもまけないだけに湖陵を愛してきた。この気持は今でも、みじんの変りもない。校舎を愛し、そこに茂る一本の樹木を愛し、その中で共に学んだ友を愛しつづけていた。

僕は、古い体育館、これと対照的な新しい体育館、これに続く、校舎、このながめを忘れることはできない。何か考え事のある時はよく古い体育館の裏手の土手に腰かけて、このながめを、しみじみとみつめたものである。その時、僕は、他の学校とはちがう、湖陵にだけしかないなにものかが、僕の胸にせまってくるように感じられてならなかった。校舎に、校庭にあふれるような若さと情熱、これが、あるいは湖陵の長い歴史の中につちかわれてきた、伝統というものなのかも知れない。誰が考えたのでもなく、誰が知って行っているのでもないただ教育内に自然發生的に生れてくる感じ、これは決して、つまらないものとして、見逃してよいものではない。

僕はこのふんいきが非常に好きなのだ。それゆえよく、これとあのながめをたのしむために、今でも学校をしばしばたずねてみる。高校生活の思い出がよみがえり、高校時代にいるような感じが、かぎりなくよみがえり、湖陵への愛着がますます強さを増してくる。これは一人僕のみの感じるところではなく、湖陵に生活した私達みんなのもつ感情と思う。校舎をたずねたくてもたずねることのできない人達、同級、同期の友と話し合うにも遠くはなれて、思いを全うできない人達、これらの人達の心を一つにむすび、私達湖陵生としてー私はまだ湖陵だと思い、一生涯そう思うであろうー固くむすびついていくことが必要ですが、この感情をみたしてくれる意味でこの誌ができたことは非常に喜ばしいことです。今こそ私達は、同窓会のあり方についてみんなが反省すべきときだと思います。先輩方のみにまかせつきりのこの同窓会に私達の若い湖陵生が積極的に参画し、同窓会に新風をふきこもうではないか。その時湖陵同窓会は、もつともつと大きな力となることと思う。

（湖陵高校第十回卒
釧路市役所　市民課）

おめでとう　湖陵同窓会報

自転車・オートバイ
株式会社
藤舘屋商会
社長　釧中第十七期　川上一夫
釧路市末広町六六〇六二番
電話五六〇八番

テレビ・ラジオ・電化製品
キタムラ電機株式会社
釧路営業所
所長　釧中第十四期　菊地寿太郎
釧路市南大通一の三
電話七六七六番
二五八〇番

帽子ならなんでも揃う
ハコダテ屋帽子店
店主　釧中第十八期　軽部晴夫
釧路市南大通一
電話五七三七番

宮地菓子舗
店主　釧中第十九期　宮地良雄
釧路市浦見町三の一五
電話五二四一番
釧路市北大通三の一二
電話三四三七番

金安薬局
店主　釧中第二十二期　金安敬治
釧路市北大通三
電話五九四七番

湖陵に拾う

わがあしあと

菅原覚也

野球に強い岐阜商業から「腕ッ節の強い国漢の教員を一人」といわれて、学生主事は私に矢を立てた。月給九十五円というので、一応その気にもなりかけたが、阿部校長から百五円出すからといわれて赴任したのが大正十三年三月末であつた。

お寺とかけもちでやれといわれた私は収入の面では職員仲間のホープであつた。でもこれは渡辺校長から「どちらか一つにしてくれ」との無理からぬ宣示で、大刀風三寸にして身をかわした訳であるもし岐阜商へでも行つてたら、漱石の「坊ちゃん」同様の目に会つていたに相違ない。酒なら武藤、安さん、阿古などと釧中の四天王の随一に数えられた豪の者だつたが、腕には自信のない私だつたから。

私が教壇に立つた時はもう初代校長のタヌキ師も亡くなつていたし、二代のベーヤは熊笹の野から遠くキャナダの農園に飛んで、昨年札幌で亡くなられたチエンジャブルこと平沢虎一先生が校長代理だつた。私は寺を継ぐので福井の宗門立学校に学んだが、夏休みには涼しさと親の待つ釧路に帰つていたから、今の梅楓塾頭の中川だの、禾だの奥村だのとよく浜で相撲をとつたりした。

牛肉なら筋のない方がよいのだが、なに せ道東唯一の最高学府の学徒のプライドを忠孝二本の白線に象徴した帽子を頂き、末は博士か大臣かと蛮歌を絞鳴る若い蛮声居士たちが、私の寺にとよく集つた。

そんな訳で私には、釧中同窓という気分が濃厚に僭在してるようだ。

私は十三期生と共に入学し、その卒業の歳に去つた。私は修身国漢と免許状通りの科目を担任したが、生徒たちは教科書のことよりも私小説的な私の寸談の方を今もよくおぼえているようだ。

同窓会に顔を出すと「いやスケボン来たぞ」と歓迎される。そして私の方では忘れてしまつているエロ、グロ放談を刻明におぼえていて恩師を前科者扱いにしてくれる。

雑話が却つて肉となり、正科の方は粕になつて排泄してしまうなんてことを考えると、教育作用の不可思議性が思われる。

ニックネームは愛称というが、私がスケボンで生徒の中にはカメレオンだのイタチだのと真い動物園みたいなクラスであつた。

スケボンの出処はこうであつた四年生の副読本に萬葉集の「恋しともいはばおろかとなりぬべし、心を見する言の葉もがな」という恋歌が出て来た。私は恋を説明するのに「諸君はまだ恋といつてもわかるまいが、鯉と鮒とはどこがちがうか。鯉にはヒゲがはえておる。諸君も毛がはえるようになると恋のことがわかるだろう……」と云つた。

次の時間黒板に「スケボン」と大書してあつた。誰がつけたか誰が書いたかおよそ見当はついたがこういう戯れは漫画と同様、その特徴を端的速巧にとらえる技能型の人間である。商売をしても事業をやつてもポイントを適確にキャツチするものだ。

私は滅多に腹の立たない性分だ腹がないから腹が立たないといわれればそれまでだが、怒るとか叱るとかはどうも私にはにが手だ。何を云われても何をされても凡々として五星霜は過ぎた。我が足跡と云つても、それは雪道を歩いたように、今は消えてしまつている。

それから「あんたが文部大臣になつたらやりなさい」とノックアウトされたエピソードまがいの想い出がある。

学期末には生徒に甲乙丙の操行点がつく。職員会議に私が甲に推薦した生徒の名をあげたら「あんな奴が……」と満場洪笑のうちに一蹴されてしまつた。

それは浜から校舎横の土俵に砂を運ばせた時のことだ。他の者は要領よくやるのに、この生徒は、撒かれては大へんとばかり用心警戒して雑要一はいを一粒まかさず運んだものだ。一事が万事、この責任と奉仕に生きることが社会をよりよくするのである。私はこの生徒にこの芽生えを発見したから操行甲に推薦した。

Y校長は慣例に反するからという理由で、私が文部大臣になつたらやれと云つた。私は大臣にはなれず、こんな話も今は諸行無常の鐘ほどにも響かないであろうが、これもわがあしあとの一つである

北見に修学旅行した時、誰かが私の水筒に酒をつめてあつた。これはいたずらではなく、疲れた親をいたわるような心遣いであつた情に棹さして流されず、智にたてこもつて固くならず、時たま鉄拳が飛んでも意地にならなかつた。こうした伝統と、湖陵という学校の立地条件に恵まれて、釧中魂というようなものが育成されたのであろうか。

「日出づる国の北陲に」という校歌と「北斗の直下ひようぼうと」の賛歌を作つたことは、感慨深い我が足跡である。

（本行寺住職、元釧中教諭）

湖陵高等学校の沿革（上）

大正元年	8月	31	北海道釧路中学校設立許可される
2.	2.	9	道庁事務官県忍氏学校長事務取扱い兼掌
2.	3.	31	熱田真吉初代校長に任ぜられる
2.	4.	8	第一回入学式挙行 一学級募集生徒250人
2.	11.	3	開校式を挙行
7.	4.	29	阿部与作第二代学校長に任ぜられる
8.	4.		二学級を募集（生徒定員500人）
11.	4.		三学級募集 （生徒定員750人）
13.	5.	20	四教室を増築
昭和 2.	6.	7	平沢虎一第三代学校長に任ぜられる
2.	10.	19	「誠愛勇」の校訓を制定
3.	3.	31	平屋二教室を増築
3.	4.	8	校歌を制定
3.	6.	2	父兄会を創立
4.	1.	9	父兄会より柔道場を寄付
4.	5.	25	渡辺繁吉第四代学校長に任ぜられる
7.	5.	16	佐藤修一第五代学校長に任ぜられる
9.	4.	26	校友会、図書舘を寄付
9.	12.	22	父兄会より寄付の工作室竣工
11.	8.	31	屋外運動場拡張
12.	12.	18	父兄会より寄付の剣道場竣工
13.	11.	30	大沢作次第六代学校長に任ぜられる
15.	4		四学級を募集（生徒定員1,000人）
16.	3.	31	父兄会より銃器室、衛生室を寄付
17.	4		五学級募集（生徒定員1,250人）
17.	5.	19	岡部金夫第七代学校長に任ぜられる
19.	3.	31	父兄会寄付の新校舎二階建竣工
19.	7.	10	大根田資雄第八代学校長に任ぜられる
22.	7.	17	安達三夫第九代学校長に任ぜられる
23.	4		道立高等学校並びに併置中学校と改称高校一、二年は五学級、三年は三学級で計636人。併中は三年五学級276人合計912人
24.	4		六学級を募集生徒定員900人実数785人
25.	4.	1	牧野包敏第十代学校長に任ぜられる。釧路湖陵高等学校と改称、通学区制による男女共学を実施（生徒958人）。木工室を改造し理化、生物教室及び準備室とする。普通教室二教室を調理室に改造、普通教室二教室を被服室に改造、平屋三教室をろう学校に貸付。図書舘を改造。三教室を南中学校に貸付。

校歌

菅原覚也作歌
信時 潔作曲

一、日出づる国の北陲に
神秘を削る丈夫の
関十一州に反響して
曙光あまねし蝦夷が原
胆よ東方の釧路岬
湖陵に立てる我が学舎

二、攻学の心自治の魂
久遠の使命胸に秘め
鈴蘭薫る春採の
丘に微笑む若人が
誠を雪に類へつつ
理想は高し 阿寒山

三、学の苑に旦暮の
師恩を讃う五星霜（三星霜）
愛ゆかしき 兄弟よ
吹雪く眺野も荒海も
訓の道を守りつつ
共に進まん 勇ましく

三代校長平沢先生

三原正二

三代目の校長平沢先生は昨秋札幌市で逝去されました。これで四代目迄の校長先生が他界されたことになります。平沢先生は二代阿部先生が外遊されるとき大物教頭として赴任され、やがて三代目校長に就任された。二代の阿部先生が創立から永年に亘り教頭校長に在任された関係で、卒業生からも深く慕われるに反し平沢先生はその御功績の割に大きく浮んでこないうらみがあります。先生の御功績や思い出は山程ありますがその代りとして奥様から墓の出来た御便りと、卒業生諸君によろしくとの御手紙を頂いたので年取った方々の夫婦の愛情（？）教訓として次ぎに載せます。（原文のまま）

其の後御機嫌よくお過しの事と存上げます。

さて過日申上げました亡夫の墓が此度出来上り一昨日納骨いたしました。貴方をはじめ皆様の御力にて新らしく墓地も求め、御影石、二重台石の上に、磨き御影石の二尺九寸の墓碑が建つて居ります。正面は「平沢家之墓」と彫り側面には戒名を彫りました。私もこの際戒名を頂き一緒に誌して頂きました。又他の側面には「海彦も山彦もゐる霧笛かな」と云う鈴木洋々子先生の句を頂いて彫りつけました。

釧路春採の丘に八年、霧笛を聞いて過したあの頃がなつかしまれます。

墓地はコンクリートにて固め、周囲に軟石の石垣をめぐらし、香炉には定紋を入れてくれました。

又供花のやうに花や木も植えられるようになつて居ります。亡き人もとれ程か喜びまして、安らかな眠りについた事と思います。

これも、皆、もとの教え子であらせられる皆様の賜物と厚く厚く御礼申上げます。

何卒、同窓会の皆様にもよろしく御礼の程、御取次ぎを御願申上げます。

室蘭の長女の家族、新得の長男など、此度この事の為めに集りました者達も帰りましたら、急に寂しいやら、安心したやらにて、起上る気力もなくなりましたが、これから主人の本やら、机やらの整理をせねばと自分で自分を励ましまして、まず第一に、この御礼の手紙を書きました。

主人のありしまゝに部屋をいつ迄も保存し度い念がしきりに致しますが、さて広くも無い家の中にそうもして居られませんから、生長して行く孫達の為に部屋を明けてやりましようと思います。

私も老年のことゝて、衰えが自分でも判ります。今迄は気も張つて居りましたが、急に労れが出たように思います。これからは御無沙汰が続くと思いますが、忘れるわけではありません。老人は想出のみに生きるもので御座いますから、始終心では想出して、有難いと思いましたり、御懐しいと思いましたり致しましても、筆取ることが臆劫になりまして、御無音に過ぎると思いますから、何卒御ゆるし願います。

何卒皆様益々御健勝に御暮し遊ばされ、よい日々を御過しのよう祈上げます。

まづは厚く厚く御礼申上げます。

昭和三十四年五月十九日

札幌市南六条西二十三丁目

平沢エシ

（第七回卒　釧商専務理事兼事務局長　元釧中教諭）

第十六期は原子核であるという考察

中江孝司

「一六会」と申しましても質屋の会では御座いません。釧中第十六期卒業の同期会を人呼んで「一六会」と称す。もつとも「一六会」なる名称は同期生のうちのその道のサムライが名付けたとも云われているが、之れは飽くまでも巷の話であるから信すべきものではない事を知つて戴きたい。

卒業以来二十有余年、馬齢も四十有余才ともなれば、昔のストライキのチャンピオンも社会のそれぞれ重要なポストにあつて、「うちの家内は理解があつてねー」とか、どうも子供が高校へ行くようになつてはねー」とか、結構重役クラスの風貌を備え、一応は不惑顔のシタリ顔であるが、そこは、蛇の道は何とやら、一六会の名にそむかぬ面構えの持主揃いである云うなれば、国定の親分か近藤勇クラスの人間が集まつていると思えばいゝ訳である。その証拠には「一六会」といえば泣く子も黙る浪曲ではないが、思い起せば二十有余年前、ニキビの花盛り、退職した六人の先生に同情と惜別の涙おさえ難く、策の良悪、本分の是非を超越して、時の校長佐藤先生に一矢報いんものと、厳島神社に籠城、開校以来の一大ストを決行したと云うのが此の「一六会」団結の遠因であり今にしてなお此のストの団結が衰える事を知らず一朝母校に有事の際はおつとり刀で馳せ参ずると云う、四十七士のそれにも似て、湖陵同窓会の原子核とも云うべき存在が、我が「一六会」であると思つていたゞくしいきゝか手前味噌ばかり申上げて恐縮ではあるが、我が一六会の面々が花もはじらう美少年の頃、彰義隊の気持その侭に、我が恩師の生活権を回復せんものと、厳島神社の社務所をその本拠として、敵は校長一人に非ず、その源泉を探ぐれば、即ち道片にあつて机上の策を以て教師の生活権を牛耳る役人、即ち教育ボスにありと、道東の一角から狼火を上げた時の我が同期生の意気や亦壮であり、是れに対し「今からでも遅くない、速かに帰校せよ」と叫んで、おしけづいた教育ボスを尻目に、孤軍奮闘した佐藤校長も亦、古武士の面目躍如として立派なサムライであつた。その頃の教師陣にあつて現在釧路に在住の先生は、本行寺のスケボンさん、即ち「菅原覚也先生」と、商工会議所事務局長のロングさん、即ち「三原正二先生」の御二人である。ストが決して良い事であろう筈のない事は勿論であるが、教師と生徒が其の心と心の結び着き、云うなれば止むに止まれぬヒューマニズムから燃え上つたこの壮挙は、二十有余年を経た今日も尚消える事なく、教師と生徒の固い絆となつて、釧路に生き続けているこの現実こそ、釧中魂或いは湖陵魂であると云つても敢えて過言ではなかろう。それにしても、あの神社の社務所で食べさせてもらつた「にぎりめし」の味のうまかつた事は、今も尚忘れ難く、思い起せばなまつばが出る事を附記しておこう。

毎年一度は一六会を開催して旧交を暖めているのであるが、最近に於ける会の様子を御知らせしよう。

卒業後二十三周年目、坂下、山崎、瀬川、伊勢、大西（徳）神君等の世話により昭和三十一年七月十四日、厳島神社宮祭に際し、旗亭喜水に於て、恩師中島先生を旭川から迎え、菅原、三原、両先生御出席のもと和気あいあいのうちに一夕の清飲清談、中島先生その瞳に泪を宿し、それでも昔のサイレンの元気その侭に一席の感謝の辞を述べれば、並居る一六メンバーもシユンとして声なく、ただ「先生何時迄も御元気で」と交るがわる先生の掌を握る。正に是れ師弟愛の極み、感涙こそ人生の華、翌日は中島先生を阿寒に御案内して別れを惜む。

卒業後二十五周年目、昭和三十三年三月十六日、一六会に因んだ此の日、同じく喜水料亭に於て、遠く栃木県より福田先生を迎え、前回同様、旭川より中島先生にも御出席を願い、三原先生の御出席のもと、亦々湧きあがる男の涙、福田先生昔のカツパさん其の侭にやおら膝を正して、懐旧の泪にむせびながら述べられる言葉の一言一句、唯々師の愛の尊きに一同寂として衿を正す。二十有五年にして相見る師弟の絆こそ、愛の極致であり、これこそが釧中魂、湖陵魂である事を再び同窓生諸氏に訴えて筆をおこう。最後に出席の一六メンバーを列記して置く。

中島弘先生、福田貞一先生、菅原覚也先生、三原正二先生

阿部正　淡路一郎　浅野英典
伊藤明　伊勢春雄　小笠原進
尾越澄　大野嘉朗　大西徳雄
大西正邦　金沢平佐久　小杉一男
小貫献策　北川佐久男　坂下忠勝
佐藤春雄　白幡富美雄　神政治
進藤励法　瀬川八一郎　鈴木渉
千田一
田中実（大川町）田中実（鳥取町）田居義博
田村勝夫　大石大二郎（高橋）
中江孝司　照井孝太郎　中島吉人
中村時夫　成田清吉　根津文男
八田大郎　福田快巌　山田正
（村田）　山崎武　吉田大二郎　吉本国雄

（第十六回卒　釧路女子技芸学校長）

つまらぬ呼びかけ

人見忠夫

「日出ずる国の北唾に…」「阿寒のお山の浅緑…」「湖陵に長き○○年…どこからか流れる蛮声に「おつ釧中だ、何期の仲間だ?」と思わず立止る。釧路を離れた土地であれば思わず屋内に入りこむ衝動を起す。

何時でも、何処でも、この平凡などうみても田舎くさいとの歌のメロデーの聞えるところ、見知らぬ人ではなかつた強い親近感と当時の釧中という名の母校をとりまく人々が脳裏にひらめく。

期が違つていても、何処の馬の骨かわからん顔であつてもいいんだね。語り合ううちに共通の人間が現われ、共通の事件が飛び出すと心は往年の世界をさまよい、対する相手はいがくり坊主の仲間と化す。

久しぶりの師弟の会合では尚更だ。もはや二尺下つて云々のまがきは既に雲散霧消、むしろ、なぐられた話、不屈な男、頭の悪い奴先生らしからぬ行動のあつた話等々はたから見れば敬愛心なんのその、互に悪口雑言めいた話に終始する。今の暴力教室なんぞはまるでチヤチなもんだ位の話にまで発展する。

だが、底に流れる師弟愛、同窓の情は話し合つてる当事者でなければわからんもんだ。

山賊の語らいのような中に、敬まうべきは敬まい、愛すべきは愛する節はちやんと保つている。郷愁に似た懐旧の情は、言葉のニュアンスを超越した共通感に昇華する。

「同窓のよしみで」とか寄付の強要、就職の斡旋、保険の勧誘、不要品の押売りなど奥の手を出す。こんな手合いに限つて断り方がまずければ(俺は特にそうだが)平の掌を返す様な渡味をきかした捨科白を残していく。

こんなのもいる。子役を使つて手紙を持たせ哀訴歎願泣きを入れる。落ちぶれし友への県高?なる友情、同情心(一寸残念だが幾分齢ホソチヤレになんなんとするにつれ、深く静かに潜航したこの郷愁が何から拍子に強く浮き上つてくるのは俺ばかりではあるまい

俺はわからんが、こんな気持は純粋だべ、なあおい。ところが待つてくれよ、同窓でもいやあなのもいるんだ。先輩後輩の別なくまではいいが、いかにも世故にたけたと云わんばかりの美辞麗句をつらね、尻の穴のむずがゆくなるようなお世辞たらたら、揚句の果ての優越感もある)から何がしの金子を與える。

與えたが最後昌統連綿とこれが続く。一ぺん出した手前、仏作つて魂入れず、と渋々ながら、なけなしのへそくりを供出する。仕舞には根くらべみたいに意地になるこの子役がやつて来るとも支那料理を食いすぎた後の様ないやあな感じ。以上のような他力本願の権化の如き存在には、状況が違いこそすれ、あんた方一度は会つたことあるべよ。

俺たちだつてケチじやないんだ。えらそうに構えているわけでもないんだ。短刀直入に「おい、こんなわけでまいつている。何とか助けてけれ」とか「これこれこうだから、買つてくれや」とでもくるなら財布の底をはたく仕儀にもなるつてもの。同窓を態のいい高等乞食にはしたくないもんね。

まだいやなことがある。過度の先輩づらつていうのか、いや味のない先輩つてものは、言葉こそ乱暴であれ、年齢を超越した仲間意識で対してくれるもんだが、変におすまし人を見下すのは先輩として当然といつた過剰意識は鼻持ちならぬ臭気芬芬。

反対にけつに青葦をぶつつけているような後輩(失礼これは結果としてこう思うんだが)が、世の中の事は酸いも甘いもかみ分けている様な顔をし、さも高等的なインテリめいた言辞を弄し、不自然に気負つて先輩を軽べつする。少量ならめんこいなと思うが、これも過剰ともなると鼻持ちならない俺も先輩もあれば後輩もある。

俺自身こんないや味はないかと思うと桑原、桑原。

さて読者の皆様方よ、母校を愛するとは建物を愛することではないんだ。伝統なんていうものも、はいて捨てる位あるもんだ。何かの時に在校生をしつた激励する場合使う言葉だからな。それよりもどこかでバツタリ会つたり、あいつなつかしい奴だと訪ねて見たり或はきも入り役が同期会、同窓会を開いたとき駈けつけたりした場合にあいつは何うした、こいつは何してる?と話題の中にとけこみ純粋に喜びも悲しみも共にわかち合おうとする仲間意識こそ母校愛に通ずるものでないのかい。同窓会はこんな自然の流れをくみとる機関であつて、何の分だ、彼の分だと強制する団体に堕しては最早ウソだね、俺は精神的寄り所として同窓という人に求めたい。建物には求めない。

それにしても湖陵校卒業者及び在校生がどうも異質の人に見えるのは俺だけなんかな。

(第十八回卒　根室教育局次長)

想い出

×藤×井×正×亮×

初めに「想い出」なんてガラにもなくセンチな標題を書いてしまつたが、未だに初恋の味も知らないボクネンの懐しい想い出と云えば何と云つても中学時代のことが一番さきにちらついて来る。

先日或会の請により若い人達に「感謝と不平の解剖」という題で話をして来たが、その席で解剖について、我々がハイテイーン時代に「オーイ、カイボウ」と叫ぶとボサツとした奴を多勢たかつて机の上に仰向けさせインボタンをはずしに掛ることだつたんですと言つて笑われたが、まさか今の男女共学の高校生は「カイボウ」なんてそんなエチケットを流行らせ様としても無理なことだろう。

何と云つても今の世代の幸せは酸甘両味に浸り乍ら勉学に励しむことの出来ることだと思われる。

丁度今頃の季節、サエモンの代数の時間は特に眠いもんだつたが或時一階の教室で窓側に並んだ連中から騒ぎが起きて授業が出来なかつたつけ。と云うのは鈴蘭香る春採の丘に高女生が遠足に来ておつたのです。相間越しに咲く花を互いに見たかつたり、見せたかつたりしたものだつたかもしれない

高女と云えば高女の運動会のあつた翌日朝礼の時、昨日女学校の運動会を見に行つた者は後で校長室に来いと伝達された。釧中生がヤジつたり騒いだりして運動会を妨害したからと高女からえらい抗議が申込まれた由、思えば随分ヤカマシかつたもんだ。ヤカマシと云えば我々同期の気の合つた八人の連中で「八釜し会」を結成して家族ぐるみ年に一、二度馬鹿騒ぎして楽しんで来たものだが、三年前二人も急逝したりして生気を失い途絶えてしまつたことは何としても残念なことだ。

ボン友にしろ先生にしろ学生時代は真剣になつて互いによく面倒を見合い、勉強もし、ふざけもしたもんだ。カツバだつたかを四、五人のモサ連中が階段から降りて来る所を待ち構えてマントを後からかぶせてゴツゴツ叩いて逃げたもんだ。一番オトナシイ先生が怒つたの怒らないの当然のこと。あの当時は無邪気なもので点数の辛いことが恨みの所為だつたのだが今ではそんな連中がそれぞれ長のつく地位について活躍しておることは嬉しいことだ。

名は体を顕わすと言うが、今をときめくミツチーではないが姓名よりは綽名を呼んだ方が懐かしさの深いものがあることは事実だ。何時も無精ヒゲの図画のタワシ、検定上りの熱血漢たる歴史のサイレン人間性の自覚を説教した国語のシゲベボジ、β線∝線の説明に三本指をあつちこつち廻しながらやる化学のウマ、此の時間に自分は奇妙に前の晩御通夜があつたことを理由にして先生の高い机の直ぐ下で、握りこぶしを重ねた上にアゴをのせ嘸をかいたもんだつた想い出は尽きない。

「ボーイズ、ビー、アンビシアス」――自分にとつては未だにベア校長の發句であつたと錯覚するのだが一抵抗の年齢になつてしまつた現在、夢多かりし時代の夢の一つも実現し得ず、やが一嫌がらせの年齢まで生きるのかどうか、身の不甲斐なさをつくづく想うのは俺だけなんかな。

(第十三回卒　大成寺住職)

同窓会の事に関して希望御意見をどしどしお寄せ下さい、各回幹事又は直接事務局(米内、又は坂下)宛に願います